建築家ヘンリー・ロバーツに関する研究
― 19 世紀労働者階級住宅の計画設計に果たした役割 ―

小川　圭子

現在我が国の住宅計画設計の主要な課題として「脱 nLDK」があるが，本論は現代日本の共同住宅の原型とも言える住宅を 19 世紀イギリスの労働者階級の住宅として提案したヘンリー・ロバーツ（以下，H. ロバーツと略す。）の活動について明らかにしようとするものである。1851 年，ロンドンで開催された万国博覧会にこの nLDK の原型となるモデル住宅を設計するが，1857 年以降病を得，具体的な計画設計活動を行わなくなり，日本の文献からその活動を追うことができなくなった。本論では H. ロバーツの著作に直接当たり，又イギリスの近年の研究を検討することによって，生涯を終えるまで，福音主義的情熱に基づき厳しい住宅問題に応えるべく活動を行っていたことが推察され，具体的な資料や実施された住宅・住宅地が現存していることが確認された。今後はこれら資料や実物の調査分析を通してその活動内容を具体的に明らかにする。

キーワード：労働階級住宅　産業革命　福音主義　ヘンリー・ロバーツ

1. 研究の意義・目的・背景及び方法

1-1. 研究の目的

建築史の教科書では H. ロバーツの名前は，1851 年開催されたロンドン万国博覧会に，勤労者のためのモデル住宅を設計した名誉建築家（1844-1853）として記述されている。ヴィクトリア女王（1837-1901）の夫君アルバート公（1819-1861）が会長を務める慈善的団体「勤労者階級の状態改善協会」が出展したものである。しかしこのような慈善団体による住宅問題の解決は困難で結論的には LLC 等公的機関による公的住宅供給の前段階として位置づけられる。『美術・建築・デザインの研究』[1] の著者ニコラウス・ペヴスナーのこのような視点は，延藤安弘の「ハウジング序説」[2] や大橋竜太の『英国の建築保存と都市再生』「労働者住宅建設と住宅地改良」[3] にも継承されている。

本研究は，この時代の慈善的団体による住宅供給史や都市計画史の一コマでその住宅供給の一翼を担った建築家という位置づけではなく，建築家 H. ロバーツ（1803～1876）が 19 世紀という時代が解決を求める課題に，建築家としてどのように向き合い解決しようとしたかについて，個人史的観点から明らかにする。

1-2. 研究の背景

近年，脱 nLDK についての議論が展開されている。新しい住宅形態を求めた建築家は多いが，この脱 nLDK [4] を明確に課題として提起したのは建築家高橋公子である。第 6 回住宅宅地審議会基本問題検討委員会の座長として高齢化社会の到来に対して住宅政策の方向性をまとめるとともに，建築家，建築計画研究者や住宅計画研究者に対して nLDK を超えた住宅の研究と提案を求めた。この後 2004 年上野千鶴子が，山本理顕，鈴木成文を巻き込んで nLDK 批判が行われた。この議論は建築家に何ができるかという問題に収斂した。しかしこの議論を繰り返すのではなく，本研究では日

東京家政学院大学現代生活学部生活デザイン学科

本及び海外において新たな勤労者，労働者の住宅像が求められた時代に建築家はどのようなアプローチを行い，どのように新しい住宅像を生み出していったかを明らかにしたい。

1-3. 研究の方法

主として文献調査による。

1-4. H. ロバーツに関する調査資料

日本での資料としては，第 1 はニコラス・ペヴスナー著，鈴木博之＋鈴木杜幾子訳の，『美術・建築・デザインの研究Ⅱ』「第 2 章初期の労働者住宅」である。期間を 20 年と限定しているが，ここにあげられる資料は極めて詳細でこの資料を基本に研究を行う。第 2 は延藤安弘の『新建築学体系 14 ハウジング』「第 1 章ハウジング序説」のなかで H. ロバーツについて更に詳しく述べている。特に，住宅供給に関する展開の中では，John Nelson Tarn の『Five Per Cent Philanthropy：An Account of Housing in Urban Areas between 1840 and 1914』, Cambridge at the University Press, 1978 の成果から慈善的団体による住宅供給の限界を明快に述べている。第 3 は大橋竜太の『英国の建築保存と都市再生』は建築保存，都市計画，住宅供給と建築家の役割，更にニューラナークに関わる新しい知見から多くを示唆される。

H. ロバーツの主体的な活動を追跡する上で調査資料として注目されるのは，H. ロバーツがまとめ，出版している『勤労者階級の住宅』（The Dwellings of Labouring Classes）である。これには 1850 年版と 1867 年版がある。いずれも仏語に翻訳され大きな反響を呼んだ。1850 年版は，1850 年 1 月 21 日に王立英国建築家協会（R. I. B. A）における第 1 回目の講演を取りまとめている。タイトルは，勤労者階級の住宅について（On the Dwellings of the Labouring Classes）である。

第 2 回目は 1862 年 1 月 20 日に同じく王立英国建築家協会（R. I. B. A)。1853 年海外に移住してから実に 12 年間を経て再び講演を行っている。内容は大きく 2 つの部分に分かれる。第 1 は，「健康な住宅の本質について」（On the Essentials of a Healthy Dwellings）第 2 は「健康な住宅が労働者に与える利益の伸張について」（ON the Extension of the Benefits of a Healthy Dwelling to the Labouring Population）であり，これまでの活動を理論化し総括するような講演であるとともに，補遺（Appendix）には貴重な資料，データがまとめられている。

H. ロバーツに関する研究は，Oxford Dictionary of Architecture and Landscape Architecture の著者でもある James Stevens Curl が 1983 年に出版した『H. ロバーツの生涯と作品 1803-1876 その福音主義的良心とモデル住宅供給と健康な国家実現への運動』（The Life and Work of HENRY ROBERTS 1803-1876 The Evangelical Conscience and the Campaign for Model Housing and Healthy Nations）が参考になる。

その他，日本の建築活動特に同潤会や住宅営団の活動とイギリスの活動のつながりを把握するためのドイツ関連資料，H. ロバーツの影響を大きく受けたフランスの資料など必要とされる領域は広い。

2. 建築家 H. ロバーツの経歴

建築家 H. ロバーツは，R. スマーク（Smirk）の弟子である。R. スマークは，大英博物館等の設計者であり，19 世紀のイギリスを代表する新古典主義の建築家である。このR. スマークの影響を色濃く受け，1832 年 Fishmonger Hall の設計競技で勝利を獲得し，実施設計を行う。ギリシャ復興様式によるデザインで 1834 年には J. ソーン賞を受ける。

図1　フィシュモンガー・ホール
（魚商同業組合ホール）[1)]

1835 年に H. ロバーツは，船員のための救貧院を設計し完成する。依頼者は 1832 年クラパム派（Clapham Sect）の St. John's Chapel の引き継いだノエル牧師（Rev. Baptist Noel）であった。これ以降，ノエル牧師との個人的友情が育まれ，この教会に所属していた，奴隷貿易廃止法を成立させたヘンリー・ソートン（Henry Thorntons）やウイリアム・ウィルバーフォース（William Wilberfoorce）との知遇を得，その後福音主義的活動に傾斜し，1844 年には勤労者階級の状態改善協会の名誉建築家の道へ進むことになる。

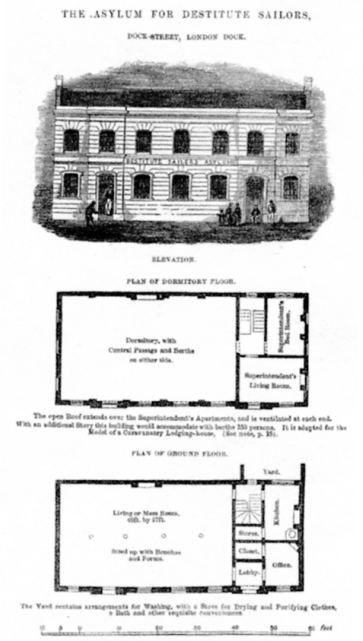

図2　船員救貧院（The Asylum for Destitute Sallors）の立面図と平面図[2)]

これ以降，ゴシック・リバイバルの教会など住宅以外の建築も同時に設計することになる。しかし，H. ロバーツのゴシック・リバイバルについての考え方は，教会建築家（Ecclesiologist）達の認めることとはならなかった。この軋轢が体調を崩し1853年にイタリアで静養する一つの要因であるともされる。

3. H. ロバーツとフラット

H. ロバーツがフラットを開発したと評価される過程は，『美術・建築・デザインの研究Ⅱ』第 2 章「初期の労働者階級住宅」に詳しい。この原稿は第 2 次世界大戦中 1943 年 The Architectural Review, XCⅢに掲載されたものである。ここでニコラウス・ペヴスナーは，「本章は，ロンドンにおける労働者階級のための賃貸住宅建設の，最初の 20 年間の記録である。」と宣言して，論を始める。ここで，訳者は flat を賃貸住宅と翻訳したり，集合住宅 2）としたりと，その文脈の中で訳語を変えている。ここでは概念を明確にするために今後の検討を可能にするために，flat の訳語の統一を図っておく。

3-1．flat の定義

『新訂建築学大系住宅 27 集団住宅』では，集団住宅を独立住宅と集合住宅に分け，集合住宅を連続住宅と共同住宅に分類している。したがって，ここで言う flat は共同住宅と翻訳する。flat を A Dictionary of Architecture and Landscape Architecture で調べると，apartment としている。Apartment は，Self-contained set of rooms for domestic use（also called a flat）on one floor. と定めている。更に，共同住宅は古代ローマ，17 世紀のパリ，18 世紀から 19 世紀にかけてエジンバラ，グラスゴーに多くの石造の共同住宅が見られるとしているとの記述もある。Self-contained の扱いにもよると考えられる。たとえば，日本の住宅統計調査では，この分類を建て方（building construction）別とし，一戸建（detached house），長屋建（tenement-house），共同住宅（apartment）に分類している。長屋建については，テラスハウス（terrace house）や連続住宅又は連続建住宅の意味で（row house）を使うこともできたと考えられるが，経緯については不明である。

共同住宅には，設備専用と共用の別が存在し，設備共用についてもわが国では共同住宅と定義してきた。つまり，住戸（住宅）とは「一つの世帯が独立して家庭生活を営むことができるように建築された各建物又は同一建物内の他の部分と完全に区画されている建築物の各部分」をいう。「一つの世帯が独立して家庭生活を営むことができる」ためには（1）専用の出入口，（2）専用の居住室，（3）専用の炊事用排水設備，（4）専用の便所，の

4 つの設備条件がととのっていなければならない。この 4 つの条件は，建物が住宅であるための基本的な設備要件であるが，わが国の住生活の実情から見てこれらの条件に適合することを絶対の要件とすることは必ずしも適当ではない。特例として，「炊事用排水設備」と「便所」については，それが共用設備であっても，他の世帯の居住部分を通らずに，かつ，いつでも使用できる状態にあれば，「一つの世帯が独立して家庭生活を営むことができる」設備がととのっているとする。[5)]

わが国最初の鉄筋コンクリート共同住宅は軍艦島（端島）の 30 号棟であるが，これは便所共同である。風呂はない。炊事場は各戸に存在するが，共同の炊事場も存在する。海外においても，この self-contained の条件がどのように適用されているか疑問が残る。

3-2. H. ロバーツが開発した共同住宅の種類

1843 年に勤労者階級の状態改善協会（S. I. C. L. C.）が設立され，1844 年に協会が初めて建設したものが，ペントンヴィル，ロアー・ロードに建設された集合住宅である。これを集合住宅と呼ぶのは，フラット，テラスハウス（ロウ・ハウス）及び中廊下形式の老齢寡婦専用の設備共用一室住居が混在しているからである。わが国では，設備共用であっても他人の居住室を通過せずに設備を使えるならば，共同住宅として取り扱う。従って，この住宅は長屋建と共同住宅が混在した集合住宅である。この共同住宅の単位は 2 階建で 1 階に 1 戸，2 階に 1 戸である。2 階の住戸へは 1 階から直接 2 階に行くことのできる独立した玄関（ドア）が設けられている。この住宅に対する極めて厳しい批判が The Builder の編集長ゴッドウィンによって行われたことが，述べられている。どの文献も衛生上に問題十分な理解が無かったとしている。ここには，その後，バックヤードを確保することを条例で決められたバイロウハウス（By-law House）が登場することを見れば，住戸間を離すというイギリス人の環境に対する強いアプローチが見られる。ただ，合理的に考えれば給排水設備がこの団地で確保されていたかどうかが評価を分けるポイントと考えられる。1 階リビングルームを し尿処理の人間が踏み込まざるを得ない状況であれば何をかいわんやであるが，下水処理設備が設けられていれば，このような計画も可能である。

むしろ，住宅需要又はニーズをきめ細かく検討し寡婦用住宅，1. 寝室共同住宅，2. 寝室テラスハウスを混在させた開発の方法，企画の方法は興味深い。

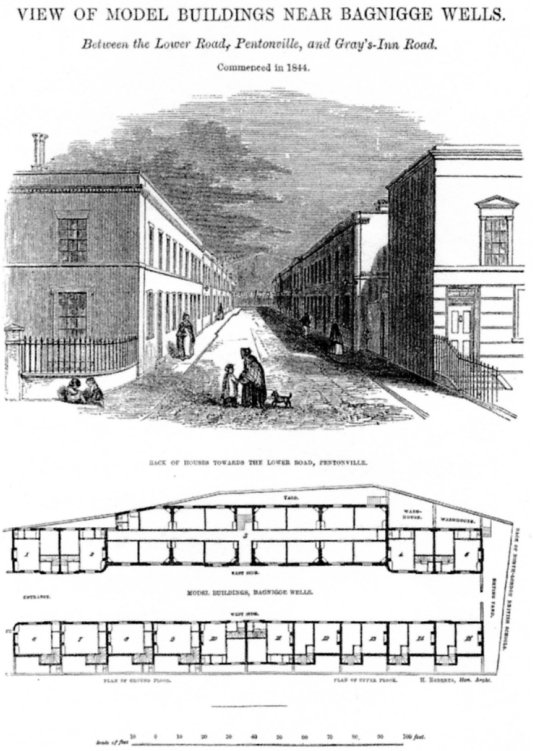

図3.　ペントンヴィル，ロアー・ロード集合住宅[3)]

次は，The Builder の編集長ゴッドウィンの評価も高いストレッサム・ストリートの共同住宅である。ここでは，日本の 51C 型とスケールを同じくして上下に並べてみた。イギリスの住宅の閉鎖性と日本の住宅の開放性を見ることができる。51C 型のテーマは，西山卯三が営団時代から提唱していた食寝分離と性別就寝を，吉武泰水はじめ研究室がその解を 2DK のモデルとして定式化したものである。

一方，イギリスの住宅の住まい方はどうかである。ここで注意しなければならないのは，A と記

している部屋は Living Room としている。日本語では居間と訳せるが，少しニュアンスが異なる。B 及び C は Bedroom としている。E は洗い場で H が流し，I は肉，食べ物の保管場所。F は便所とダストシュートである。

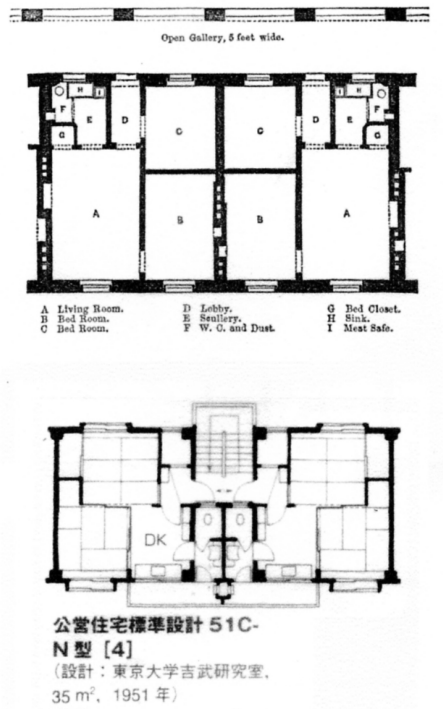

図4. ストレッサム・ストリートの共同住宅と 51C 型の比較（スケールを同一にした場合の比較）[4)]

暖炉があるのは Living Room と寝室のうちひとつである。A. クワイニーによれば，お産の時などに暖房を入れるが普段は火を入れない。Living Room の暖炉はキッチンストーブとして調理にも使われる。つまり Living Room は Kitchen の役割も果たす。更に入浴は日常洗い場の壁にかけてあるカナダライを使って Living Room で入浴するということである。

更に，G は Bed Closet である。これも A. クワイニーに従えば，簡易ベッドの収納スペースである。つまり，住戸は DK 又は LDK 的な役割を果たす Living Room と Bedroom に壁で区切られている。しかし家族人数が多く，性別就寝が確保できなければ，若者男子は，一定のルールに従って Living Room で就寝することになる。

このように考えると，イギリスの住宅についても食寝分離，就寝分離の原則が存在しているように考えられる。一方日本の住宅については，食寝分離は確保されているが，寝具として布団を使用していることもあり，イギリスの住宅より寝室の転用性が高い。

住宅は家族などの集団を区分し安定した生活を保証することがその機能であるが，家族人数の減少は，その区分の仕方を大きく変えてきている。51C 型にも見られるように，日本の住宅の間仕切りの遮断性弱く，改変が極めて簡単であることがわかる。

図5. ストレッサム・ストリートの共同住宅[5)]

ストレッサム・ストリートは片廊下型である。コの字型に囲んだ一方は塀をめぐらし囲われた庭を形成し，パースでは子どもを遊ばせる親子が描かれている。一部は掘り込まれ地階のドライエリアとなっているが，他は乾燥した気持ちのよい外部空間である。

住宅難を解消するためにさまざまな住宅供給を行っている。まず既存の建物を改修した簡易宿泊所である。共用の居間，浴室，流し場などがあり，共同の寝室にはベッドが並んでいる。しかしベッドの間には仕切りも無く，収容施設のような様相である。

4. モデル住宅プランの刊行

1844 年に勤労者階級の状態改善協会（S. I. C. L.

C.）が設立当初は，出版によって新しい勤労者階級の住宅を普及することを検討していた。Day & Son. によるリトグラフである。

又，実際建設された住宅についてもその内容を公表，出版しこの考え方が浸透することに意を用いた。

協会設立後の最初の仕事は又，実際建設された住宅についてもその内容を公表，出版しこの考え方が浸透することに意を用いた。

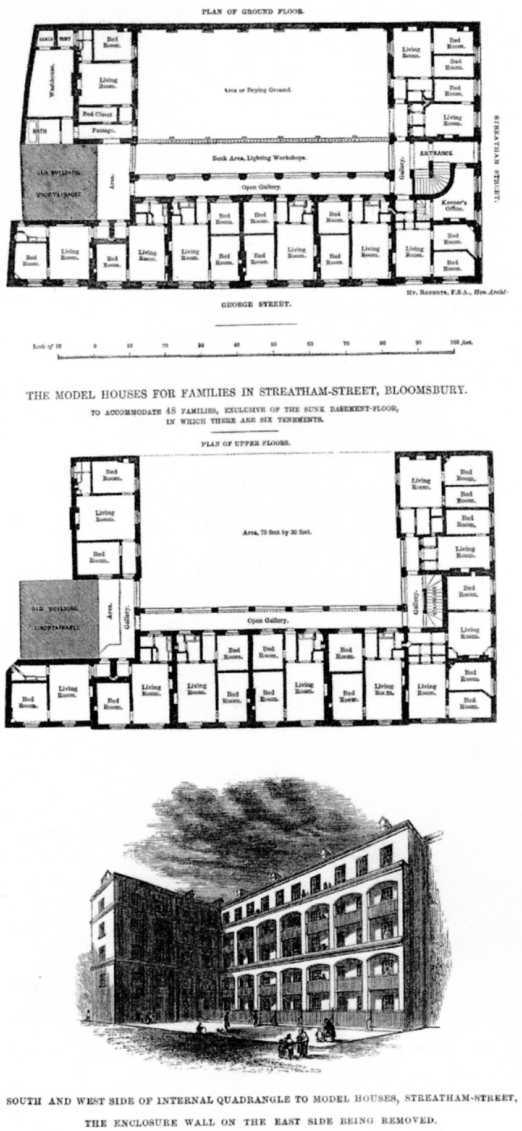

図6. ストレッサム・ストリートの中庭[6)]

5. H. ロバーツの郊外型住宅開発

5-1. The Windsor Royal Society Cottages

勤労者階級の状態改善協会（S. I. C. L. C.）は都市部の勤労者階級の住宅を改善するだけではなく農業地域の開発を行っている。このような活動は，農村の様相を大きく変えていったといわれる。都市における住宅問題の深刻さとは比較できないが都市地域への人口の集中は，田園都市のイメージを髣髴とさせる住宅地を生み出すことになった。H. ロバーツが開発した住宅は 2 戸一で semi-detached house とは呼称せず，double cottage と呼んでいる。

この設計図書は，オックスフォードの図書館に保管されており，又住宅・住宅地の一部はウィンザーのアレクサンドラロードのプリンス・コンソート・コテッジとして現存している。

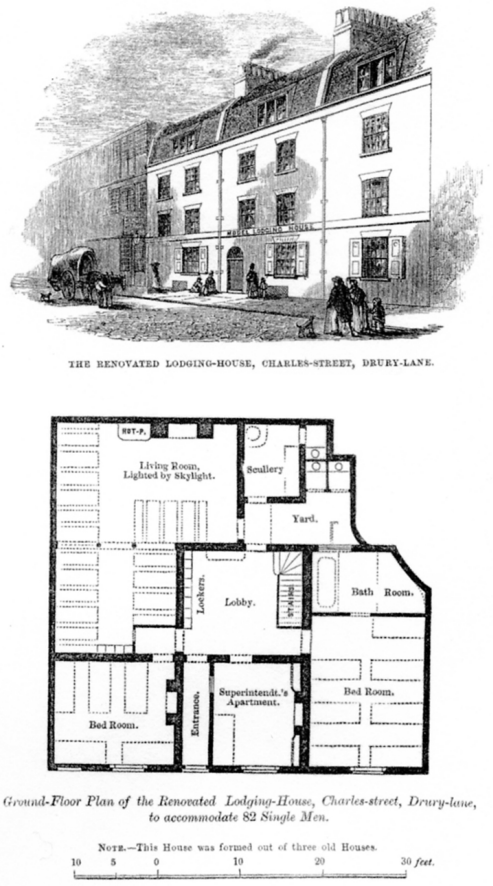

図7. 改修による簡易宿泊所[7)]

図8. H. ロバーツによってデザインされた小規模一戸建住宅（Single cottage）[8]

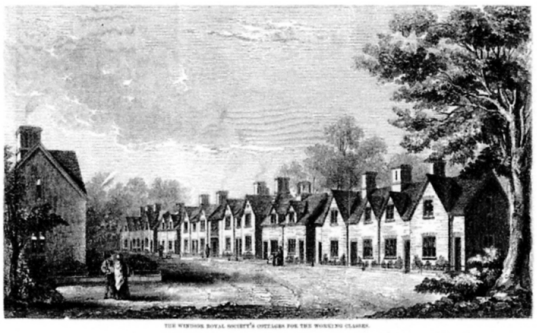

図9. ウィンザーロイヤル・ソサェティの村[9]

5-2. パンフレットの発行

実際の建設だけでなく，出版によって新しい労働者用住宅を提案している。ニコラウス・ペヴスナーが紹介した初めての住宅プロジェクト「ペントンヴィル，ロアー・ロード集合住宅」より以前に発行したパンフレットがある。これ以外にもこのようなパンフレットを参考に建設した具体的な事例としてタンブリッジの住宅地を上げることができ，これについても住宅が現存していることが確認できた。

6. 構法開発者としてのH. ロバーツ

H. ロバーツは，住宅建設の生産性の向上及び断熱性能の向上のため，中空の大型レンガを開発した。単に意匠のみの建築家ではなく極めて実践的な建築家であった。

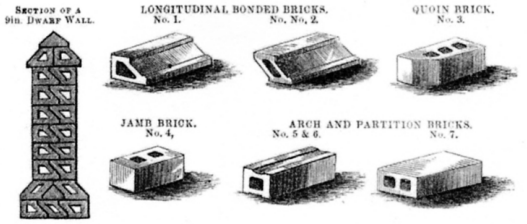

図10. ホローレンガ[10]

7. H. ロバーツの社会的背景と啓蒙活動

7-1. 福音主義者としての H. ロバーツ

James Stevens Curl によれば，H. ロバーツは熱烈な福音主義者であった。特に彼はクラパム派（Clapham Sect）でその時期最も賛美されていたノエル牧師（Rev. Baptist Noel）の個人的な友人でもあったこともあり，このグループと密接な関係があった。勤労者階級の状態改善協会（S. I. C. L. C.）のメンバーにはこのクラパム派のメンバーが多く含まれていた。先にも述べたようにクラパム派は奴隷貿易廃止運動を指導し，奴隷貿易廃止法が1807 年成立するまで活発に活動した組織でもあり，この組織を核に血縁，結婚などによる親族関係さらには政治的な関係が輻輳し大きな活力を持った。病を得，具体的な設計活動はできなくなるが，生涯を終えるまで，福音主義的情熱に基づき厳しい住宅問題に応えるべく活動を行っていた。

7-2. 著作による啓蒙活動

『勤労者階級の住宅』は，H. ロバーツの最も有

名な著作であるが各国で翻訳がなされている。関心の領域は計画，材料，構法そして法律制度，更には協会の経営状態，投資家の利回りについては詳細な資料を準備している。このような資料に基づいて，慈善団体として住宅供給の行き詰まりから株式会社化や公共機関による支援方法までより具体的に構想することができたのである。このような活動の集積によってはじめて新しいパラダイムシフトが起こってくるのだと考えられる。

H. ロバーツの著作はフランス語をはじめで多くの国で翻訳され，特にフランスでは瞬く間にその考え方が受け入れられた。これに応えるため，精力的に活動し，講演し，コンサルティングしている。この過程でサインの無い多数のパンフレット類が存在している。

7-3. 法律・制度に H. ロバーツが与えた影響

H. ロバーツのこのような精力的で精緻な活動は，法律制度の成立，内容にも大きな影響を与えた。

これからの具体的な研究においては，これまで述べた H. ロバーツの多角的な活動とその背景に着目して現実の H. ロバーツに迫りたい。

引用図版

1） Tarn, John Nelson, Five Per Cent Philanthropy : An Account of Housing in Urban Areas between 1840 and 1914, Cambridge at the University Press, 1978, p. 104-1055
2） Roberts, Henry, The Dwellings of the Labouring Classes, Their Arangement and Construction, With the Essentials of a Healthy Dwelling. , The Society for Improving the Condition of the Labouring Classes, 1867（Fourth Edition Revised and Enlarged), p.107
3） 前掲書2), p.88-89
4） 前掲書2), p.109　財団法人日本建築学会,第 2 版コンパクト建築瀬系資料集成〈住居〉(丸善, 2006 年)，124 頁
5） 前掲書2), p.97
6） 前掲書2), p.97, 100-101
7） 前掲書2), p.91
8） 前掲書2), p.137　No.9
9） 前掲書2), p.81
10）前掲書2), p.127

引用文献

1） ニコラス・ペヴスナー『美術・建築・デザインの研究Ⅱ』(鹿島出版会，1980 年)，45 頁
2） 延藤安弘，三宅醇，小泉重信，西村一朗，住田昌二『新建築学体系　14 ハウジング』(彰国社, 1985 年)，28 頁
3） 大橋竜太『英国の建築保存と都市再生』(鹿島出版会，2007 年)，71 頁
4） アンソニー・クワイニー，花里俊廣訳『ハウスの歴史・ホームの物語（下）イギリス都市住宅とコミュニティ』(住まいの図書館出版局, 1995 年)，APPendix 12-13 頁
5） 『昭和 33 年住宅統計調査結果報告』「5 調査単位」(総理府統計局，1960 年)，2 頁

参考文献

1） Curl, James Stevens, The Life and Work of HENRY ROBERTS 1803-1876, PHiLLiMORE, 1983
2） ―, A Dictionary of Architecture and Landscape Architecture, Oxford University Press, 2006
3） Pevesner, Nikolaus, Studies in Art, Architecture and Design, Volume Two Victorian and After, Thames and Hudson, 1968
4） Roberts, Henry, The Dwellings of the Labouring Classes Their Arrangement and Constructions, Society For Improvement the Condition of the Labouring Classes, 1851（Elibron Classics 2007）
5） ―, The Dwellings of the Labouring Classes, Their Arangement and Construction, With the Essentials of a Healthy Dwelling. , The Society for Improving the Condition of the Labouring Classes, 1867（Fourth Edition Revised and Enlarged）
6） Tarn, John Nelson, Five Per Cent Philanthropy : An Account of Housing in Urban Areas between 1840 and 1914, Cambridge at the University Press, 1978
7） アンソニー・クワイニー，花里俊廣訳『ハウス

の歴史・ホームの物語（上)(下）イギリス都市住宅とコミュニティ』(住まいの図書館出版局，1995 年）
8）上野千鶴子『家族を容れるハコ　家族を超えるハコ』(平凡社，2002 年）
9）延藤安弘，三宅醇，小泉重信，西村一朗，住田昌二『新建築学体系 14　ハウジング』(彰国社，1985 年）
10）大橋竜太『英国の建築保存と都市再生　歴史を活かしたまちづくりの歩み』(鹿島出版会，2007 年）
11）―『イングランド住宅史　―伝統の形成とその背景』(中央公論美術出版，2005 年）
12）―『コンパクト版　建築史　日本・西洋』(彰国社，2009 年）
13）後藤久『西洋住居史　石の文化と木の文化』(彰国社，2005 年）
14）佐藤健正「第 2 話　近代ハウジングの原点―公衆衛生法と労働者階級の住宅改善―」『イギリスのハウジングを巡る旅　―近代のハウジングはどのようにつくられてきたのか―』(市浦ハウジング＆プランニング，2007 年)，(佐藤健正講演「イギリスの住まいとまちづくり」，大阪住まい情報センター，2007 年）
15）鈴木成文，上野千鶴子，山本理顕，布野修司，五十嵐太郎，山本喜美恵『51C　家族を容れるハコの戦後と現在』(平凡社，2004 年）
16）―『五一C 白書　私の建築計画学戦後史』(住まいの図書館出版局，2006 年）
17）鈴木博之『住宅の逆説』第 3 集（レオナルドの飛行機出版会，1977 年）
18）ニコラス・ペヴスナー，鈴木博之＋鈴木杜幾子訳『美術・建築・デザインの研究Ⅱ』(鹿島出版会，1980 年）
19）日笠端，入沢恒，鈴木成文，大庭常良『新訂建築学大系 27　集団住宅』(彰国社，1971 年）
20）マルク・ブルディエ『同潤会アパート原風景日本建築史における役割』(住まいの図書館出版局，2006年）
21）山本理顕編『徹底討論　私たちが住みたい都市身体｜プライバシー｜住宅｜国家』，(平凡社，1992 年）

（受付　2010. 3.25　受理　2010. 5.31）